



### ■ショートコメント■

◆本作の原題は『SIR』。つまり、「旦那様、ご主人様」ということ。その邦題は『あなたの名前を呼べたなら』とされたが、それはなぜ？それは、本作のラストシーンを見ればすぐにわかるから、それまで我慢して、自分の目でしっかりと。

◆幕末から明治にかけての日本は、必死になって若者を西欧（列強）に留学させて、先進国の知恵や技術を日本に持ち込んだ。しかし、戦後数十年を経た日本は“内向き志向”となり、その意欲を失っている。それに代わって、欧米、特に米国への留学に力を入れているのが、中国とインドだ。

しかして、1973年にインドの富裕層の家庭に生まれたロヘナ・ゲラは、アメリカで大学教育を受けて映画監督になった女性。本作は彼女の長編デビュー作だが、2008年カンヌ国際映画祭批評家週間に出品された本作は、見事GAN基金賞を受賞した。インドでは、富裕層の米国への留学が目立つ一方で身分制度が残り、都市と農村の格差も大きい。幼い頃のロヘナ・ゲラはメイド付きの家庭で育ったが、その中でインドの身分制度、階級格差（の矛盾）をどう理解すべきかについて悩んだらしい。そんな自分自身の問題意識が、本作に！

◆チラシによれば、本作のストーリーは次のとおりだ。

経済発展著しいインドのムンバイ。農村出身のメイド、ラトナの夢はファッションデザイナーだ。夫を亡くした彼女が住み込みで働くのは、建設会社の御曹司アシュヴィンの新婚家庭……のはずだったが、結婚直前に婚約者の浮気が発覚し破談に。広すぎる高級マンションで暮らす傷心のアシュヴィンを気遣いながら、ラトナは身の回りの世話をしていた。ある日、彼女がアシュヴィンに小さなお願いをしたことから、ふたりの距離が縮まっていく…。

ラトナ（ティロタマ・ショーム）がアシュヴィン（ヴィヴェーク・ゴーンパル）にした「小さな願い」とは、S I Rであるアシュヴィンが仕事に出ている午後2時から4時の間だけ、裁縫を教えてくれる店に通うこと。S I Rは快くそれを承知してくれたところから、ラトナの夢の実現に向けた第一歩が始まったが・・・。

◆“身分違いの恋”をテーマにした小説や映画は多い。本作もその一点にテーマを絞ったワンイシュー映画だが、ロヘナ・ゲラ監督自身が体験し、悩んできた問題意識が根底に隠れているだけにその描写は繊細で、“S I R”であるアシュヴィンとメイドであるラトナの心理分析も行き届いている。もっとも、私にはアシュヴィンがなぜラトナに惹かれて行ったのかがイマイチハッキリしないのが、少し残念だ。

◆心の広いS I Rがメイドのちょっとした夢に手を貸してやるくらいはどこにでもある話。また、恋人の浮気によって結婚がボツになってしまったアシュヴィンの心は大きく傷ついていたから、相手がメイドでもちょっとした優しさを感じればそれに惹かれたのも当然。しかし、そのことと、S I Rがメイドに恋するとか愛するとかは大きく違うのでは？ 現にアシュヴィンは、男2人で飲みに行った時には、自分たちに興味を示す2人連れの女を見て自宅に“お持ち帰り”していただくくらいだから、適当な遊び人・・・？ そんなアシュヴィンが本気でラトナに惚れ、万難を排してラトナとの結婚を目指すなんてことが、ホントにありうるの・・・？

◆本作はほぼ全編を通して、アシュヴィンとラトナ2人だけの“絡み”に集中しているから、わかりやすい。ラトナがアシュヴィンの気持ちを嬉しいと思うのは当然だが、本作が描くように、それ以上に迷惑と思う気持ちが強いのも当然。いくらS I Rの自分を愛する気持ちがホンモノだと信じたくても、“親の反対”、“世間の目”等の理由でアシュヴィンから「やめた」と言われれば、ラトナはどうしようもないわけだ。したがって、アシュヴィンからそんな気持ちを打ち明けられたラトナは、結局S I Rのお屋敷を出て行くことになったのは当然だろう。それを見ていると、やはり「身分違いの恋」は成就しないもの。そう納得していた（？）が、傷心のまま故郷に戻ってきたラトナに、誰かがファッションデザイナーの仕事を手伝ってくれたうえ、ある日ラトナの携帯に電話がかかってきたが、それは誰から？ そして、その電話に対するラトナの対応は？ とりあえず、本作ラストはハッピーエンドで、めでたし、めでたし、としておこう。

2019（令和元）年8月27日記